

Title	唐木圀和教授退任記念号発刊にあたって
Sub Title	
Author	桜本, 光(Sakuramoto, Hikaru)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2006
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.49, No.2 (2006. 6)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	唐木圀和教授退任記念号 中国経済特集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20060600--001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20060600--001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 唐木圀和教授退任記念号発刊にあたって

唐木圀和教授は2006年3月31日をもって定年で退職になられました。退任記念号発刊にあたり同教授の略歴のご紹介と商学部教員を代表しまして、今日まで40年余りにわたる教育・研究・大学運営の多大な功績に対し一言御礼を申し上げたいと思います。

唐木教授は、1963年3月に商学部を卒業され、商学研究科修士課程に進まれ、博士課程を1968年3月に修了されました。博士課程在学中の1965年4月に商学部助手に採用されて以来、1972年4月に助教授、そして1984年4月に教授および商学研究科委員に就任され現在まで、一貫して本塾商学部および商学研究科を拠点に研究・教育に携わっておられます。専門分野の研究・教育における業績はもとよりのこと、商学部学習指導主任、大学国際センター学習指導主任、大学学生部長、大学学生総合センター長、そして体育会部長および理事を歴任されるなど、塾内行政の分野においても多大の貢献をなされております。

唐木教授の研究は、発展途上国の経済開発論を源として、経済近代化の視点からとらえることの重要性に着目され、開港前後の日本経済に関する研究成果をはじめとして、米国フレッチャー法律外交大学院客員研究員時代には、A. コール教授のもとで東アジア経済の研究をされました。その後ハーバード大学では、G. ハーバラー教授やA. O. ハーシュマン教授などから得た貴重な研究上の示唆をもとに、一貫して、独自の開発経済論を展開しておられます。1979年中国の改革・開放政策のもとで統計上の整備などが進み、中国経済を国際経済学の枠組みで分析できるようになったことを好機として、研究対象は「中国の経済近代化」に移り、その研究成果は学術誌、および日本国際経済学会やアジア政経学会などを通じて活発に発表され、中国経済研究分野を代表する重鎮の研究者の一人として高い評価を得ておられます。

唐木教授は、中国経済研究の先導者として、他学部や他研究科からの履修学生も含め、これまで本塾商学部および商学研究科における当該専門分野の研究・教育の中核を担ってきておられます。学部ゼミナールや大学院の学生に対する誠実で熱心な教育によって、唐木研究室から多くの優秀な卒業生が輩出しております。さらに日本大学法学部、武蔵大学経済学部、常磐大学国際学部などの非常勤講師や中国復旦大学客員教授を歴任するなど、塾外の教育活動も積極的に行ってこられました。またアジア政経学会評議員や日本私立大学連盟の役員として、その活躍の場は幅広く、多大の重責を担い、社会的な貢献を果たされてきておられます。

商学部の学部改革や体育会・塾の様々な危機に際してその都度唐木先生は、重要な提言や活発な議論を誘発する意見を述べてこられました。その若々しく、エネルギーあふぬ姿を知っている我々にとって定年と聞いて大変驚いているのが実情であります。

慶應義塾に定年規定がある限りいたしかたがないことですが、今後も健康に留意され、なお一層のご活躍をお祈りいたしております。2007年に商学部50周年、2008年に塾150周年を迎えます。4月から名誉教授として研究・教育の場で、これらの周年事業への対応を含めた後進の指導をお願いし、はなはだ簡単ですが、御礼の言葉にかえさせていただきます。

2006年6月25日

商学部長 桜 本 光